

文学部 比較文化学科 小論文

【注 意】

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は13時00分から15時00分まで(120分間)です。
3. この問題冊子は表紙以外に9ページあり、解答用紙は4枚あります。
4. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
5. 解答はすべて解答用紙の解答欄に記入してください。
6. 解答用紙の氏名欄を除き、受験者本人の特定につながるような氏名、住所、学校名等は記述しないでください。
7. 解答用紙を持ち出してはいけません。持ち出した場合、試験をすべて無効とします。
8. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

問題Ⅰ 次の英文を読んで、以下の設問に答えなさい。

As artificial intelligence (AI) becomes an ever more common feature of people's lives, governments are now discussing the technology as both an opportunity and a concern. The world's first AI Safety Summit, hosted by Britain in November, started a global conversation on how AI could be developed safely.

Chatbots* like ChatGPT, personalized social media feeds and facial recognition software are just some of the ways that AI has become a part of daily life. But the world is struggling to keep up with the evolving technology — a problem this summit intended to address. Almost 30 countries were represented, including China, the United States and Japan, in addition to the European Union (EU).

Since the summit, the EU has agreed to its AI Act, which is set to become the first comprehensive legislation regulating AI. But, while a final vote is expected soon, the law would only come into force in 2025 at the earliest. High level talks are clearly just beginning, but AI is already making an impact. Several professionals explained how they are currently using AI in their work.

(1)A limited number of hospitals in Britain are using AI as a warning system to improve patient safety. The technology is helping surgeons avoid critical structures, such as key blood vessels* and nerves, when performing an operation. It works by acting as a virtual guideline on top of original camera footage* of the patient.

Dr Dan Stoyanov, who leads the project at University College London, said the system is both making surgery safer and helping to train junior surgeons. But he cautioned, there are still risks due to the differences in each person's body. "It's only by being in the clinic and being in many clinics, that we can learn more and really understand the diversity of events and structures that appear during surgical procedures," he explained.

Those in the events industry are also using AI. (2)A humanoid* robot called Ameca uses ChatGPT to communicate with customers. It can interact in over 20 languages, including Japanese, English and Chinese, with relatively lifelike answers and realistic facial expressions. When asked, "Do you think that AI could be a threat to human beings," it replied: "Only if someone programs it to be — otherwise, I'm harmless."

Carlo Sangilles, an engineer at the company that developed Ameca, said it was designed as a tool for humans and would not take over someone's job. He said AI robots could be installed in nursing homes as conversational partners for the elderly. While Ameca is unable to walk and talk simultaneously, Sangilles expected this would be possible in the next 15 years. But he noted, there is uncertainty over how AI will develop.

The unknowns of AI development worry many experts — even Yoshua Bengio, who is known as a ③ “Godfather of AI.” The computer scientist attended the summit where he was appointed to produce a report into Frontier AI: next-level technology that has the potential to perform a wide range of tasks. Bengio, a professor at the University of Montreal, explained the danger will be when AI surpasses the intelligence of humans across multiple fields. He wants governments to take urgent action. “We have to be smart about how we can monitor the development of these systems, regulate them and trust each other,” he said.

Critics claim the summit did not make enough progress in addressing the safety issues of AI. One organization that was represented, the Future of Life Institute, shared a roadmap of measures that they want governments to take. Proposals included legally-binding* safety standards and a limit to the amount of power and resources AI is permitted to use. Executive Director Anthony Aguirre also raised concerns that AI systems could be integrated into militaries within three to five years. He strongly warned against making life or death decisions using AI. Another group, Pause AI, protested outside the summit to demand a halt to all new AI development until regulators are given time to catch up.

(Taken from Maddie Rose Baker, "AI safety summit urges global action," NHK World Japan article 2024/2/15 <https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/en/news/backstories/3047/>)

(注)

*Chatbots テキストや音声を通じて人間と双方向の会話をするプログラム

*blood vessels 血管

*footage 映像

*humanoid 人間の形をした

*legally-binding 法的拘束力のある

- 問1 下線部(1)のようなAIの活用がもたらす利点とその限界を、本文に即して200字以内で答えなさい。(30点)
- 問2 下線部(2)のロボットは具体的にどのようなことができますか。また、どのような場面での使用が想定されていますか。本文に即して100字以内で答えなさい。(20点)
- 問3 下線部(3)の人物はAIの利用についてどのような主張をしていますか。本文に即して120字以内で答えなさい。(20点)
- 問4 本文で議論されている内容をふまえて、今後どのようにAIを利用していくべきだと考えますか。あなたの意見を英語で答えなさい。(30点)

問題Ⅱ 次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

歴史系の博物館で展示しようとする歴史事象とは、本質的に多面的・立体的で、なおかつ構造的なものである。それに対し、展示という表現行為は、基本的にはある連続的な事象を切り取ったワン・ショットでしか表現され得ないという特性をもっている。

この「切り取る」という作業工程において、何を、誰が、どのように、誰のために、いかにして切り取るのか、という問題が生じる。このときに、切り取られた部分は明確なメッセージとして表現しうるが、切り取られなかった部分、あるいは切り取られた残余の部分はまったく捨象されてしまうことになる。注意すべきことは、このとき切り取られなかった部分とは、本質的に不必要なものではなくて、展示する側がある一定の基準によって判断した結果なのである。そのために、展示されるものがどのように選択されたかをめぐる意見の相違や対立が生じてくる。これが展示表象の政治性といわれるものである。

人間の過去を対象とする歴史においては、直接の当事者がいない場合が圧倒的に多い。だが、このことは、歴史展示における表象・表現が、100%展示する側に委ねられているということを意味するものではない。

逆に、当事者がいないからこそ、常に自らが作り上げた展示が、どのような歴史を表象し、それを見る人にどのような影響を及ぼすのかが常にチェックされる必要があるものとする。言うなれば、展示する側が自らを相対化する視点が要求されている、ということになる。だが、このことは、言うほどに容易なことではない。

自らを相対化し、立ち位置を常に見定めることはどのようにしたら可能なのだろうか。

この問題を考えるために、当事者がいたり、経験や記憶が伝えられていたりするために問題が顕在化しやすい近現代の歴史展示について考えてみたい。

広島は、言うまでもなく人類が核兵器の犠牲にされた最初の場所である。しかし、広島は同時に、呉^{くれ}という軍港も擁していた。その呉には、現在、海

上自衛隊呉地方総監部が置かれ、海軍の施設があった場所がそのまま海上自衛隊の施設になるなど、その地政学的継続性は明らかである。そうしたなか、2005年に呉市海事歴史科学館、通称大和ミュージアムが開館した。

この博物館は、10分の1スケールの戦艦大和の模型を展示していることで知られている。開館以来、2008年3月までに390万人が訪れており、広島平和記念資料館の入館者数が減少している状況とは対照的である。

大和ミュージアムの展示は、呉に鎮守府^(注1)がおかれ、海軍工廠^(注2)が設置されて以降の歴史であり、呉が戦闘用船舶の開発に果たした役割を強調するものとなっている。ただし、その強調の仕方は、あくまでも技術史に主眼がおかれたものである。このことはホームページや展示図録においても次のように表明されていることからわかる。

大和ミュージアムは、こうした明治以降の日本の近代化の歴史そのものである「呉の歴史」と、その近代化の礎となった造船、製鋼を始めとした各種の「科学技術」を、先陣の努力や当時の生活・文化に触れながら紹介しています。そして、皆様に、我が国の歴史と平和の大切さについて認識していただくとともに、科学技術創造立国を目指す日本の将来を担う子ども達に科学技術の素晴らしさを伝え、未来に夢と希望を抱けるような「呉ならではの博物館」として、教育及び文化等に寄与してまいります。

この文章は、科学技術の素晴らしさを次世代に伝えていくという方針が謳われた文章であり、この博物館が、戦闘用船舶という「兵器」を中心とした展示を作るにあたって、偏りのないように意を配っていることがうかがえる。こうした配慮を、ここでは「中立性」と呼ぼう。

戦争の、特に兵器の展示にあたり、技術をもって中立性を保証しようという手法は、たとえば、原爆を広島に投下したB29^(注3)「エノラ・ゲイ」の展示をめぐる激しい対立の末、技術の発展という脈絡で展示することにしたスミソニアン^(注4)の国立航空宇宙博物館の事例をみてもわかる。

だが、このように意図された中立性は、成功しているだろうか。筆者には、この中立性が展示意図とは逆の効果をもたらしているように思われてならな

い。なぜならば、技術をキーワードとして展示が構成されていても、そこに展示されているのは兵器であり、またそれを支えた技術であることに変わりはないからである。

むしろ、中立的であるということは、大和の性能（これは殺傷能力である）に対して中立であると同時に、大和が作られた目的や、大和が戦闘に加わったことによる犠牲者についても中立的にならざるを得ない。大和の場合はその技術力の高さが示されているのだから、それは兵器としての優秀さをそのまま示すことになるのであって、そのことがその兵器の存在自体の正当化へと転化していく契機となるだろう。

先に示したホームページ・図録の文章を見ても、博物館ではあくまでも技術史の一環として大和を展示・表象していることはうかがえる。これは意識的であり、明示的でもある。しかし、展示全体を通してみれば、展示されるものの負の側面への言及が不足していることや、各所に配置された戦争のメタファー^(注5)（東郷平八郎^(注6)の懐中時計、山本五十六^{やまもと いそろく}^(注7)搭乗機の破片など）が、意図せざるメッセージを強力に発している。

そうした大和ミュージアムとは対照的に、原爆被害という1点から、その悲惨さとそれを起点とした平和へのメッセージを発し続けているのが広島平和記念資料館である。

全体的に、原爆の被害の大きさとその内容が、実物資料によって、これでもかというほどに見せつけられ、大きな衝撃をうける。

だが、先に述べたように、歴史は多面的・立体的かつ構造的なものであるとすれば、原爆投下という歴史的事実も、その一面ということになる。確かに、原爆被害は悲劇的なものであったことは間違いないが、それはあくまでも被害者としての苦しみである。そのことを強調すればするほど、それと対極にあり、そして、同じ原因を持つ日本軍が戦地において行った残虐行為の記憶が後景へと遠ざかる契機となってしまうのではないだろうか。他者の声から耳をそらすことを正当化してはいないだろうか。ここに歴史表象の難しさがある。このことは意識しようとも、されずとも、展示という表象では必ずつきまとう問題である。

ただし、ひと言付け加えれば、ここで展示されている原爆の圧倒的な破壊力は、戦争という歴史事象のもつ複雑さを超えて、絶対悪としての核兵器を浮き彫りにしてくる。このメッセージは強力であり、原爆投下という歴史的事実と、平和への希求という未来への視線が一致している稀有な例であることは間違いない。

展示をする側は、常に自分（たち）の制作した展示は、何かを表象するものであるということに意識的である必要があるだろう。そして、歴史展示の場合には、見る人に影響を与えることに自覚的でなければならない。

しかし、こうした言い方は抽象的かつ教訓的にすぎ、何をもって自覚的とするべきか、という疑問が起るだろう。ここでは、歴史展示の可能性を考える足掛かりとして、テッサ・モーリス＝スズキ^(注8)の議論を紹介したい。

モーリス＝スズキは、「連累^{れんゐ}implication」と「歴史への真摯さ historical truthfulness」という2つの概念を提案する。まず、「連累」の定義について見てみよう。

……「連累」とは以下のような状況を指す。わたしは直接に土地を収奪しなかったかもしれないが、その盗まれた土地の上に住む。わたしは虐殺を実際に行わなかったかもしれないが、虐殺の記憶を抹殺するプロセスに関与する。わたしは「他者」を具体的に迫害しなかったかもしれないが、正当な対応がなされていない過去の迫害によって受益した社会に生きている。（『批判的想像力のために』57頁）

補足しておく、この「連累」状況の説明は、モーリス＝スズキが現在オーストラリアに住み、そこでの先住民アボリジニに対して過去に行われた収奪や虐殺に対してどのように向き合うか、ということ課題としてなされたものである。

二つ目の「歴史への真摯さ」は、次のように説明される。

「歴史への真摯さ」とは、歴史的出来事と、その出来事を記録し表象する作業に関わっている人々、そして表象されたものを見たり、聞いたり、読んだりする人々の間での一連の相互批判的な関係全体を通じて表されるものである。（同書 83 頁）

この「歴史への真摯さ」は、われわれが過去に向き合う態度に関わるものである。そこには、

- ① 私たちや私たちが生きる社会は歴史の産物であり、過去を理解しなければ私たちの世界を理解することができない。
- ② 過去を見る視点は多数存在し、私たちは他者の歴史の見方に心を開いて耳を傾ける必要がある。
- ③ 他者の見方に耳を傾けることで、われわれは自分たちの位置を確認し、過去に対する見方が歪められたり制約されたりしていないかを検証する。

といった要素が含まれており、以上のような点に留意することで、「異なる過去の解釈を選択する根拠を確立する」ための出発点になりうる可能性が開けるといえる。

これらの概念を歴史展示の場に適用することは可能であろうか。おそらく、そのためには、歴史展示自体が、自らを縛っている制約を乗り越える覚悟が必要になるに違いない。

たとえば、連累という概念に基づいた歴史を展示するのであれば、その場で起こった過去について、正の過去だけでなく負の過去も包み隠さず展示することが要求されよう。このことは、おそらく日本の歴史系博物館の大多数を占める公立博物館においては困難なことであるにちがいない。だが、公立博物館の役割の一つが、その対象とする地域で起こった出来事を記録し、伝えていくことであるとすれば、自分たちにとって都合のよい歴史だけでは済まされない。

また、歴史への真摯な態度を前提とした歴史展示であろうとするならば、展示が完成したものでも、完結したものでもなく、常に他者との対話の場として機能し、場合によっては常に批判に曝^{あは}されるものであることを自覚しなければならないだろう。

歴史は、支配者が支配することの正当性を示す道具であり、近代以降、自分たちの由来を説明するものとして機能していた。そして、近代の産物である博物館自体も国民を創出し、国民国家を統合するための装置であった。そういう意味で、「歴史系博物館」「歴史展示」は、政治的に左右されやすい危

うい橋の上に常に置かれているのである。

(黒沢浩「歴史展示と歴史表象」『歴史学研究』による。ただし、出題に際して原文の一部を改めた。)

(注1) 鎮守府：旧日本海軍の機関で、軍港の防備を司った高等司令部。

(注2) 海軍工廠：旧日本海軍直営の軍需工場。

(注3) B29：アメリカのボーイング社が開発した戦略爆撃機。

(注4) スミソニアン：アメリカの国立特殊学術協会。

(注5) メタファー：隠喩。ある物事を具体的な別のもので例える比喻の一種。

(注6) 東郷平八郎：旧日本海軍の軍人、最終階級は元帥海軍大将。1848年生まれ、1934年没。

(注7) 山本五十六：旧日本海軍の軍人、最終階級は元帥海軍大将。1884年生まれ、1943年没。

(注8) テッサ・モーリス＝スズキ：1951年イギリス生まれでオーストラリア在住の歴史学者。専門は日本経済史、思想史。

問1 広島にある二つの展示施設の歴史展示について、本文に即してそれぞれの特徴と問題点を300字以内でまとめなさい。(40点)

問2 下線部の「何をもって自覚的とするべきか」という問いに対する筆者の考えをまとめ、それに対するあなたの考えを400字以内で述べなさい。(60点)